

王羲之書翰中の語彙

佐藤利行

【キーワード】王羲之・書翰用語・六朝漢語・口語語彙

はじめに

東晋の王羲之（三〇三〜三六一）の書翰は、『右軍書記』『淳化閣帖』『二王帖』などに収められているもの、および我が国に残存しているものなどを合わせると、およそ六百数十条が現在に伝えられている。（注①）今、息子の猷之に宛てた書翰を見てみよう。（注②）

中郎女、頗有所向不。今時婚対、自不可復得。僕往意、君頗論

不。大都此亦当在君。耶。（『淳化』五・『二王』上）

中郎の女、頗か向ふ所有りや不や。今時の婚対、自ら復た得可からず。僕の往の意、君は頗か論ずるや不や。大都此れは亦た当に君に在るべし。耶より。

「中郎の娘は、少しは気に入りましたか。この度の縁組は、またとないものです。私の先頃の思いを、少しは考えてみてくれましたか。

大体この事は、もちろんお前次第なのですが。父より。」という内容のこの手紙は、王羲之と息子の猷之との関わりを知る上でも非常に興味深いものである。言語の面から見れば、ここに二度出てくる「頗く不」という表現は、六朝漢語に特徴的なもので、王羲之の書翰ではこの例の他に次のようなものがある。

知数致苦言於相。時弊亦何可不耳。頗得應對不。吾書、未被答。

得桓護軍書、云白米增運、皆当停為善。（『右軍』二八五）

数しば苦言を相に致すを知る。時弊亦た何ぞ耳にせざる可けんや。頗か應對を得たりや不や。吾が書、未だ答へられず。桓護軍の書を得たるに、白米の増運は、皆な当に停むるを善しと為すべしと云ふ。

「しばしば宰相に苦言を呈しておられることを知りました。時の疲弊を（宰相が）どうして耳にされていないことがありますでしょうか。

少しは反応がありましたか。私の上書には、まだ返答がありません。桓護軍のお手紙を受け取りましたが、それには『白米の増運の件は、すべて停止した方がよからう』とありました。」

これらの用例からも分かるように、「頗く不」という表現は、「少しはくか？」という意をあらわすもので、六朝期に特徴的な表現である。また、前者の書翰に見える「大都」という語は、「大体のところ」「ほとんど」という意をあらわす副詞で、例えば次のような書翰にも用いられている。

吾服食久、猶為劣劣。大都比之年時、為復可耳。足下保愛為上。臨書但有惆悵。（『右軍』六・『淳化』四・『二王』中）
吾は服食すること久しきも、猶ほ劣劣^たなり。大都^{おほよそ}之を年時に比^{くら}ぶるに、復た可^まと為す^なみ。足下は保愛を上と為せ。書に臨んで但^ただ惆悵^{ちゆうたう}たる有るのみ。

「私は薬を長いあいだ服用していますが、やはりはつきりしません。（しかし）大体のところは以前に比べれば、まだましです。あなたもお体を大切にして下さい。この手紙を書きながら、ただ悲しい思いであります。」

先生適書。亦小小不能佳、大都可耳。此書、因謝常侍信還。令
知問。可令謝長史具消息。（『右軍』二二・『淳化』五）

先生より適^{あた}ま書あり。亦た小小 佳なる能^{あた}はざるも、大都^{おほよそ}可なる耳^{のみ}。此の書、謝常侍の信に困りて還す。知問^しせ令^しめよ。謝長史をして具^{つぎ}に消息^しせ令^しむ可し。

「先生からたまたまお手紙を頂きました。やはり少しばかりよくならないようですが、大体よいようです。この手紙は、謝常侍の使いの者にことづけてお返しいたします。（何かあれば使いの者に託して）お知らせ下さい。謝長史にも詳しく連絡をさせて下さい。」

以下、小論では王羲之の書翰に見える語彙について、六朝期に特徴的に用いられていると思われるものを取り上げて考察することにしたい。

〈大都〉

先にも取り上げた「大都」という副詞の用例には、他にも次のようなものがある。

○足下行穰久。人還竟快不快。大都当任県、量宜。（『右軍』二九〇）
足下穰^{じやう}に行くこと久し。人還^また竟^{つひ}に快^ひなりや不^{いな}や。大都^{おほよそ}任に県に当つるには、宜しきを量る。

○吾為亦劣、大都復是平平。隔耳許日、前後有其効、何喩。（『右軍』

二二・『淳化』五

吾は為に亦た劣なるも、大都復た是れ平平なり。耳を隔ぐこと許日、前後して其の効有らば、何にか喩へん。

○大都夏冬自可足。麦秋輒有違。此亦人之常。(『二王』中)

大都夏冬は自ら足れりとす可し。麦秋には輒ち違ふ有り。此れ亦た人の常なり。

○賢妹大都勝前、至不欲食、篤羸。恒令人憂。(『右軍』二六四)

賢妹は大都前に勝るも、食を欲せざるに至りて、篤羸なり。恒に人をして憂へ令む。

○賢妹大都転差、然以故、有時嘔食不已。是老年衰疾、更亦非可倉卒。大都転差為慰。(『右軍』三一六・『淳化』三)

賢妹は大都転た差ゆるも、然れども故を以て、時に嘔食して已まざること有り。是れ老年の衰疾にして、更に亦た倉卒なる可きことに非ず。大都転た差ゆるを慰めと為す。

○都新婦、大都小差。(『右軍』三九二)

都新婦は、大都小しく差ゆ。

○姉累告安和。梅妹大都可行。袁妹極得石散力。(『右軍』二二〇)

姉は告を累ぬるに安和なり。梅妹は大都行なる可し。袁妹は極めて石散の力を得たり。

○伯熊過。見之、悲酸大都可耳。惟垂心。(『淳化』三)

伯熊過る。之を見るに、悲酸も大都可なる耳。垂心を惟ふ。

二十一

王羲之の書翰には、六朝漢語に特徴的な副詞を見いだすことができる。先に取り上げた「大都」もその例である。ここでは「二十一」という副詞を見てみることにする。

○当遠行、諸懷何可言。一十必早發。想足下如向期也。(『右軍』一九四)

遠行するに当たりて、諸懷何ぞ言ふ可けんや。一十必ず早に發せよ。足下の向の期の如くするを想ふなり。

○吾猶不勝能佳、一十早往遲。(『右軍』一九五)

吾は猶ほ能く佳なるに勝へざるも、一十早に往きて遅たん。

王羲之の書翰に見える「一十」という語は、ここに取り上げた二例のみであるが、実は此の語は西晋の陸雲(二六二～三〇三)が兄の陸機に与えた書翰「与兄平原書」の中でも用いられている。(注③)

●一十当出略通、日在馬上、此不可諧。（『与兄平原書』六）

一十当に略通を出だすべきも、日び馬上に在れば、此れ諧ふ可からず。

●一十当黄之、書不工、紙又悪、恨不精。（『与兄平原書』三五）

一十当に之を黄すべきも、書は工みならず、紙も又た悪ければ、精ならざらんことを恨む。

これらの用例から「一十」という副詞は「ともかく」の意であることが分かる。王羲之の書翰、陸雲の書翰の他に「一十」の用例は未だ見ない。

〈信・信使〉

王羲之の書翰には「信」という語がよく使われている。

○近有慰阮光禄信在耳。（『右軍』一九七）

近ごろ阮光禄の信の在るを慰むる有る耳。

○信既乏劣、又頭痛甚。（『右軍』四〇六）

信は既に乏劣にして、又た頭痛甚だし。

○信反、得去月七日書、知足下故羸疾。（『淳化』四・『二王』上）

信反り、去月七日の書を得て、足下の故より羸疾あるを知る。

○信云、舎子別送、乃是北方物也。（『淳化』四・『二王』中）

信云ふ、舎子の別に送りしは、乃ち是れ北方の物なりと。

○此書、因謝常侍信還。令知問。（『右軍』二二・『淳化』五）

此の書、謝常侍の信に因りて還す。知問せ令めよ。

○又出藥精、要有驗、信以可致。（『淳化』四・『二王』中）

又た藥精を出だせば、要し驗有らば、信以て致す可し。

○不審定何日当北。遇信復白。遲承後問。（『淳化』五）

定た何れの日に当に北すべきかを審らかにせず。信に遇はば復た白せよ。後問を承くるを遅つ。

○祠物当治護。信到、便遣来。（『王右軍集』二）

祠物は当に治護すべし。信到らば、便ち遣し来たれ。

○此信、過不得熙書。想其書一一也。（『右軍』二六四）

此の信、過るも熙の書を得ず。想ふに其の書には一一するならん。

○僕信還。奉州将去月十二日告、甚慰。(『右軍』一四九)

僕かへの信かへ 還かへる。州将かへの去月十二日の告かへを奉かへじ、甚かへだ慰かへむ。

○須信還。知定当近道、迎足下也。(『右軍』六七)

信かへの還かへるを須かへつ。定かへめて当かへに近道かへして、足下かへを迎かへふべきを知かへるなり。

○不多書、尋口更有信也。(『玉右軍集』二)

書多かへからざるも、尋かへいで口更かへに信有かへらん。

○及領軍信。書不次。(『右軍』一七七)

領軍かへの信かへに及かへぶ。書は次かへあらず。

○信使甚数、而無還者、似書疏不可得。(『右軍』二三五)

信使かへ 甚かへだ数かへばなるも、還かへる者無かへく、書疏かへは得かへ可かへからざるに似かへたり。

これらの「信」「信使」という語は、手紙を運ぶ使者という意味で用いられている。恐らく「信」は「信使」を省略した言い方であると思われる。王羲之の時代、書翰は今日の電話あるいは携帯電話のメールのようなものであって、その手紙を運ぶ使者が家々の間を頻繁に行き来していたようである。

へ・自・爾・己

六朝期には「自・爾・己」を接尾辞として伴う副詞が多く見られる。これら「自・爾・己」の字は一字の副詞に接尾辞として添えられ、副詞を二音節化しており、口語的要素の強いものと考えられる。

○任意在世中、政自不得不小俯仰同異。(『右軍』二五四)

意かへに任かへせて世かへの中に在かへるも、政かへ自かへだ小かへしく同異かへを俯仰かへせざるを得かへず。

○政自当豁其胸懷。然得公平正直耳。(『右軍』二二四)

政かへ自かへだ当かへに其かへの胸懷かへを豁かへくすべし。然かへらば公平正直かへを得かへん耳かへ。

○諸宜皆当自詳計審日遲望。(『右軍』三四九)

諸かへろは宜かへしく皆かへな当かへ自かへに計かへを詳かへかにし日かへを審かへかにして遲望かへすべし。

○未能忘己、便自不得行。(『右軍』二二四)

未かへだ能かへく己かへを忘かへれざれば、便かへ自かへち行かへなふを得かへざらん。

○民自服橡屑、下断、体气便自差強。(『右軍』三六四)

民かへは橡屑かへを服かへして自かへり、下かへは断かへえ、体気かへは便かへ自かへち差かへや強かへし。

○又不能不痛熙存亡。政爾復何於求之。（『淳化』三）

又た熙の存亡を痛まざる能はず。政爾に復た何に於いてか之を求めん。

○政爾遠来、於礼誠不可違。所以狼狽遠迎。（『右軍』三四八）

政爾に遠く来たれば、礼に於いて誠に違ふ可からず。狼狽して遠く迎へし所以なり。

○但異域之乖、素已不可言。（『右軍』一七九）

但だ異域の乖なること、素已り言ふ可からず。

〈書翰用語〉

今日の日本では手紙の冒頭に「拝啓・拝復（返信）・謹啓（呼びかけ）」などの頭語を冒頭に添え、結語として「敬具・かしこ（女性）・ではまた」などの語で結ぶ習慣がある。また前文を省略して主文から入る場合には「前略」、その結びとしては「早々・草々」などの語を用いている。

王羲之の書翰の場合にも、これらの頭語・結語に相当するような語の用例が見られる。以下、その主なものを見てみよう。

羲之死罪。伏想朝廷清和。稚恭遂進鎮。東西齊拳。想剋定有期

也。羲之死罪死罪。（『右軍』三六一）

羲之死罪。伏して想ふに朝廷は清和ならん。稚恭は遂に鎮を進む。東西より齊しく拳ぐれば、想ふに剋定するに期有らん。羲之死罪 死罪。

羲之死罪。前得雲子諸人書、並毀頓。胡之惟分推、難為心。当有分西者否。羲之死罪。（『右軍』一八四）

羲之死罪。前に雲子の諸人の書を得たるに、並びに毀頓す。胡之は惟れ分推すれば、心を為め難し。当た西に分する者有りや否や。羲之死罪。

九月三日、羲之報。敬倫遮諸人、去晦祥禪。情以酸割。念卿傷切。諸人豈可堪処。奈何奈何。及書不既。羲之報。（『右軍』一七三）

九月三日、羲之報ず。敬倫・遮の諸人、去晦祥禪す。情は以て酸割なり。卿の傷切を念ふ。諸人豈に堪ふ可き処あらんや。奈何せん 奈何せん。書に及ぶも既くさず。羲之報ず。

九月二十八日、羲之頓首頓首。昨者書、想至參軍。近有慰阮光禄信在耳。許中郎家、欲因書比去報。如庾君、遂不救疾。摧切心情、不得自（塗兩三字）甚痛。当奈何。深当寬勉、以不忘先心。臨紙但有酸側。王羲之頓首。（『右軍』一九七）

九月二十八日、羲之頓首頓首。昨者の書、想ふに參軍に至らん。

近ごろ阮光祿の信の在るを慰むる有る耳。許中郎の家には、書に因りて比る報を去らんと欲す。庾君の如きは、遂に疾を救はれず。心情を摧切し、自ら□するを得ず。□□甚だ痛む。当た奈何せん。深く当に寛勉すべきも、以て先の心を忘れず。紙に臨んでは但だ酸惻有るのみ。王羲之頓首。

三月十三日、羲之頓首。近反亦至。念足下哀悼之至、不可勝。更寒外、足下何如。吾劣劣。力遣知問。王羲之頓首。〔右軍〕四〇九)

三月十三日、羲之頓首。近ごろ反も亦た至る。念ふに足下は哀悼の至りにして、勝ふ可からざらん。更に寒外となるに、足下は何如。吾は劣劣たり。力遣知問。王羲之頓首。

羲之白。一日、殊不叙闊懷。得書、知足下咳劇。甚耿耿。護之。冀以散。力不一。王羲之白。〔右軍〕四一一)

羲之白す。一日、殊に闊懷を叙せず。書を得て、足下の咳の劇しきを知る。甚だ耿耿たり。之を護れよ。以て散せんことを冀ふ。力不一。王羲之白す。

六月三日、羲之白。徂暑。此歳已半。感慨彌深。得二十七日書、知足下安。頃耿耿、愁増患耶。善消息。吾至勿勿。常恐一夏不可過。不一。王羲之白。〔右軍〕四二四)

六月三日、羲之白す。徂暑なり。此の歳も已に半ばなり。感慨すること彌よ深し。二十七日の書を得て、足下の安なるを知る。頃る耿耿として、愁ひて患ひを増すを耶。善く消息せよ。吾は至つて勿勿たり。常に一夏の過ごす可からざるを恐る。不一。王羲之白す。

旦奉祠、感思悲慟。得書知問。吾乏劣。力不一。王羲之問。且に奉祠し、感思悲慟す。書を得て問を知る。吾は乏劣たり。力不一。王羲之問す。〔右軍〕四二六)

秋中感懷。異雨冷、足下各可耳。胛風遂欲成患、甚憂之。力知問。王羲之頓首。〔淳化〕三・『二玉』中)

秋中感懷あり。異に雨冷なり、足下各の可可ならん耳。胛風は遂に患を成さんと欲し、甚だ之を憂ふ。力知問。王羲之頓首。

四月廿三日、羲之頓首。昨書不悉。君可不。腫劇憂之。力遣不具。〔淳化〕三)

四月廿三日、羲之頓首。昨の書は悉さず。君は可なりや不や。腫ること劇しければ之を憂ふ。力遣不具。

僕可耳。力数字。王羲之頓首。〔淳化〕三)

「僕は可なる耳^{のみ}。力数字。王羲之頓首。」

ここに王羲之の書翰に見える書翰用語の幾つかの典型的なものを列挙した。これらの例を見て分かることは、書き出しには、まず「九月三日」「九月二十八日」「三月十三日」といったように月日を記すということである。

また、いわゆる頭語に相当するものとしては、「羲之死罪」「羲之頓首」「羲之白」などの語が用いられている。これらの語は、当然ながら手紙の相手によって使い分けをされている。

結語に関しては、多くのものが用いられており、およそ「羲之死罪」で書き出されたものは「羲之死罪」結び、同様に「羲之頓首」「羲之白」を頭語としてものは同じく「羲之頓首」「羲之白」を結語としている。その他、次に挙げるような多くの結びの語が用いられている。

- 「力遣知問」（力めて知問を遣^はる）。ようやく手紙をしたためました。
 「不一」（一一ならず）。草々。
 「力不一」（力むるも一一ならず）。草々次。
 「力知問」（力めて知問す）。草々。
 「力遣不具」（力めて遣るも具はらず）。早々次。
 「力数字」（力めて数字す）。早々。

これらの書翰用語はこれ以外にも多くの用例があつて、その詳細については稿を改めて検討したいと思つている。

おわりに

以上、今回は東晋の王羲之の書翰を取り上げ、そこに用いられている特徴的な語彙について検討を加えた。六朝期には前代には用例の無かつた多くの語彙が生まれている。こうした語彙は王羲之の書翰のみならず、本論でも触れたが西晋の陸雲の書翰、さらに同時代の文人達の書翰にも多く見ることが出来る。更に六朝期に漢訳された多くの仏典の中にも共通の語彙を見いだすことができるが、今後はこれらの語彙を収集・整理して、六朝漢語の特徴を解明したい。

注

- ① 森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書翰』（白帝社）を参照。
 ② 使用したテキストは、『右軍書記』（唐・張彦遠輯『法書要録』所収）、『淳化閣帖』（清・乾隆三十四年勅輯『武英殿聚珍版』所収）、『二王帖評釈』（宋・許開撰『横山草堂叢書』所収）および『王右軍集』（明・張溥輯『漢魏六朝一百三家集』所収）である。
 ③ 佐藤利行『陸雲研究』（白帝社）を参照。

王羲之書翰中的詞彙

東晉王羲之（三〇三～三六一）的書翰文稿，除收錄于《右軍書記》《淳化閣帖》《二王帖》等作品以外，還有部分殘存于我國。統觀二者，約有六百數十條流傳至今。因為這些書翰多運用當時的口語表現，可以說是研究六朝漢語的寶貴文獻資料。

此次，筆者關注王羲之書翰之中的口語詞彙，在顯示其用例之外，研究解釋詞意。潛心進行六朝漢語研究的基礎作業。